

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	徒然草に現れたる美的思想に就て
Author(s)	富成, 喜馬平
Citation	龍南, 202: 1-9
Issue date	1927-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8949">http://hdl.handle.net/2298/8949</a>
Right	

# 徒然草に現れたる美的思想に就て

富 成 喜 馬 平

徒然草が兼好の趣味論であると云ふ考へ方は可なり以前から云はれてゐる事であり、又廣く一般に肯定されて居る見解である然し趣味と云ふ言葉では餘りに包容力が強くて、概念が明確を缺くかと思ふ。そこで私は、その趣味の基調は、美的と云ふ所にあるのではないかと考へる。勿論美的と云ふ言葉も甚だ定義しにくい言葉であつて、「美とは何であるか」と云ふことは、私にも分らないし、又分りたいとは思はない。美一般と云ふことは今問題ではない。問題となるのは、兼好が如何なるものを、如何んな風に美と感じたかと云ふ事である。

兼好の美的思想を理解する爲めには、まづ彼の人生觀を一瞥する必要がある。彼の美的思想の全背景をなすものは勿論彼の人格そのものであるが、然しその人格の反影とも見る可き彼の人生觀が、彼の美的思想の主調を形成してゐるとは見逃せない。

彼の人生觀を一言で現せば無常觀である。萬法流轉の思想である。之は明かに佛教乃至は老壯思想の影響であらう。然しそれは單なる佛教思想の現れではなくして、兼好自身の人格により、消化され、燃焼されて結晶した無常觀である。室町の末から南北朝にかけての目まぐるしい世相の變遷を親しく目撃した兼好の、感じ易い魂が直接體驗した無常觀である。否、それは吾々人性の根本に深く根ざせる如實の相そのものの現れである。靜かな澄んだ心を以て、世界を眺め、反省した時、誰が無常を感じないだらうか？——こゝに無常と云ふのは、本來の意味に於ける無常である。無常と云ふ言葉は、やゝともすれば、暗い消極的な、來世思想を思はせ易い。然し本來無常とは、常で無い、常恒不變でない、盛なるものは衰へ、敝なれば則ち新なりと云ふ意

味の無常である。消極的であると共に積極的である。——萬物は流轉する。之は動かす事の出来ない確かな事實である。直接現前の相<sup>あらた</sup>である。

此の無常觀は徒然草全體を貫いて流れ、從て兼好の人格の基礎をなし、吾々人性の根本を形ち造る思潮である。

「飛鳥川の淵瀕常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。」こう云つて彼は、京極殿、法成寺などの荒れはてた廢墟の狀<sup>さま</sup>を叙し、何にも頼みにはならないものだとして述べてゐる。(二十五段)その他、「人の心不定なり、もの皆幻化なり。何ごとかしばらくも住する。」(九十一)と云ひ、又「人の命は雨のはれまを待つものかは。」(百八十八)と述べ「不定と心得ぬるのみまことにてたがはず。」(百八十九)と斷定し、「よろづの事は頼むべからず。」(二百十一)と警告し、「おろかなる人はまたこれをかなしむ、常住ならむことを思ひて變化の理を知らねばなり。」(七十四)と教へて居る。

然し彼は此の無常の事實に直面して、長明の如き咏嘆を發してはゐない。只現實は無常だと云つた迄である。彼は事實を慨くには餘りに理智的であつた。彼は此の與へられたる事實を克服することによつて永遠ならんとの希望をさへ懷いた。彼は第三十八段に於て、「埋もれぬ名を永き世に残さむこそあらまほしけれ、」と述べてゐる。こゝに彼の偉大がある。無常觀を以て女々しい感傷主義と見るのは餘りに淺膚であり短見である。

諸行は實に無常である。萬物は流轉して暫くも止まることはない。ユーゴーが云つたと傳へられてゐる如く、人間は皆死刑の宣告を受けてゐる。只執行が猶豫されてゐると云ふ迄である。然し乍ら、如何に無常であるとは云へ、そこに、變化し、流轉しつゝあるものの存在を見逃してはならない。刑の執行される迄は吾々は生きてゐるのである。こゝに人生の基礎を置くものが刹那主義である。この刹那の價値の尊重こそ實に新なる人生の發見である。新生は之より始るのである。

彼は「刹那おぼえずといへども、これをはこびてやまざれば、命を終ふる期忽に至る。されば道人は、遠く日月を惜むべからず、たと今の一念空しく過ぐることを惜むべし。」(百八)と云つて寸陰を惜む人なきことを慨いた。又牛を賣るものゝ話を記し

て、「一日の命萬金よりも重し。」「人死をにくまば生を愛すべし。存命のよろこび日々に樂まざらむや。」（九十三）と説いた。

諸行無常を悟ることによつて客歡の世界を否定した彼は此の刹那の尊重によりて新に嚴然と屹立せる主觀の世界を見出したのである。こゝに彼の努力主義が始まる。「未だ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども道になづまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳たけ人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下のものゝ上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されどもその人道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。」（百五十）「大かたのふるまひ、心づかひも、おろそかにしてつゝしめるは得のものと成り。たくみにしてほしきまゝなるは失のものと成り。」（百八十七）

この現實尊重こそ、彼を單なる世捨人と區別せしむる所のものである。彼は無常を痛感したにも拘らず、多くの世捨人の陥りし如く、現世を避し、厭離し、冷笑し、嘲罵することをしなかつた。無常なるが故に益々彼は現實の尊きことを感じ且之を愛したのである。然しこの理を知ることに比して、この理を體現することの如何に困難なことだらう。誰も無常の理を知らぬ者はない。然し吾々はやゝともすれば懈怠の心の起ることをまぬかれぬ。「道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。いはむや一刹那のうちに於いて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念に於て、たゞちにすることの甚だ難き。」（九十二）この懈怠の心を調伏せしむるものは、強き道への憧憬と共に、鋭き自己批判の精神である。「いはむや一刹那のうちに於いて、懈怠の心あることを知らむや。」何と云ふ鋭い批判であらう。彼は客觀に向けた鋭き反省の眼を自らの上にも向けることを忘れなかつたのである。「よろづのこと外に向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。」（百七十一）「かしこげなる人も、人の上をのみばかりでおのれをば知らざるなり。われを知らずして外を知るといふことわりある可からず。さればおのれを知るをもの知れる人といふべし。」（百三十四）この鋭く目醒めた魂を以て現實生活に臨むものは、無限に起り來る慾求と、限りある自己の力と弱さとの矛盾に悩まされるであらう。こゝに於て吾々は、慎重なる考慮を以て、取捨撰擇を行はねばならない。何を得可きかと云ふ問題は常に何を捨つ可きかと云ふ問題を隨伴する。

捨つることに巧なる者は既に半ば成功せるものであらう。「されば一生の中に、むねとあらまほしからむ事の中に、いづれかまさるとよく思ひくらべて、第一のことをあんじさだめて、その外はおもひ棄てゝ一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたのこの來らむ中に、少しも益のまさらむことをいとみて、その外をばうち棄てゝ、大事をいそぐべきなり。いつ方をも棄てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。」(百八十八)この捨難撰擇を行ふには、勇猛敢斷の精神が必要である。この果斷決行こそ眞の勇氣と云ふ可きであらう。「大事を思ひ立たむ人は去り難く心に懸らむ事の本意をとげずして、さながらに捨つべきなり。」(五十九)この撰擇を誤らず、勇猛精進する者は人生の成功者であり、然らざる者は限り無き悔ひを残すであらう。「忽ちに此世を去らむとする時にこそ、始めて過ぎるぬ方の誤れる事は知らるれ。誤と云ふは他の事にあらず、速にすべき事を緩くし、緩くすべき事を急ぎて過ぎし事の悔しきなり。人は無常の身に迫りぬる事を心にひしと懸けて、束の間も忘るまじきなり。」(四十九)この最もよき失敗者の例は第百八十八段に描かれたる法師の生活である。彼はまづ説經師にならんために乗馬を習つた。次で早歌と云ふことを習つた。そうして「二つのわざやうく境に入りければ、いよいよよくしたくおぼえてたしなみけるほどに、説經習ふべきひまなくて年よりにけり」と云ふのである。然しこれはこの法師のみではない。「世間の人皆このことあり、若きほどは諸事につけて、身を立てゝ大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久しくあらます事ども心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしありなる目の前のことのみにまぎれて、月日を送れば、ことごとくなすことなくして身は老いぬ。つひにものゝ上手にもならず、思ひしやうに身を持たづ、取りかへさるゝよはひならねば、走りて阪を下る輪のごとく衰へゆく。」(百八十八)かく考へて來ると徒然草は單なる趣味論として見るには餘りに恐ろしい思想に満ちてゐる。

この勇猛精進の具現化された一例を吾々は第六十段に描かれた眞乘院の盛親僧都の生活態度に於て見出す。勿論吾々はこの場合事柄そのものよりも、そこに含まれたる意味に重きを置かねばならない。兼好がこの僧都の生活を長々と述べたのも實にこの意味のためだつたと考へられる。僧都は人も知ることく、みめよく、力强よく、大食にて、能書學匠辯説人にすぐれて一宗の法

燈であつた。いもがしらと云ふものを好んで多く食つた。その態度がいかにも眞剣で一筋で、力強く、徹底してゐる。更に餘念がない。僧都は「とき非時も、人にひとしく定めてくはず、わがくひたき時、夜中にも曙にもくひて、ねぶたければ晝もかけこもりて、いかなる大事あれども人のいふこと聞き入れず。目さめぬればいく夜もいねず、心をすましてうそぶききなど、よのつねならぬさまなれども、人にいとはれずよろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。」(六十) 無常を覺り、道に精進する者の姿を彷彿せしめるではないか。

この捨離懺悔の思想の趣味の上に現れたものが兼好の簡素を愛する精神である。彼は全ゆる冗漫を嫌つた。餘りに技巧的なもの、不自然なもの、ぎょう／＼しいもの、こつたもの、度をすごしたものの此等は皆彼の惡む所であつた。この思想は無常觀と等しく徒然草全体に渡つて見出される。「いやしげなるもの。居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持佛堂に佛の多き。前に石、草木の多き。家の中に子、孫の多き。人にあひてことばの多き。願文に作善多く書きのせたる。」(七十二) 之と同じ考は第十段にも見える。「多くのたくみの、心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度でも列べおき、前裁の草木まで、心のまゝならず造りなせるは見るめも苦しくいとわびし。又屏風、障子などの繪や文字の話から「損ぜざらむためとて、品なく見にくきさまにしなし、めづらしからむとて用なきことどもし添へ、わづらはしく好みなせる」を非難し、「ふるめかしき様にて、いたくこと／＼しからず、費もなくてものがらのよきがよきなり。」(八十一) と云つてゐる。

又第百十六段に於ては、寺院の號等をつけるのにも昔の人は只ありのまゝにやすくつけたが、この頃の人が才覺をあらわさうとしてくるのはよくないと云ひ「何ごともめづらしきことを求め、異説を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ」と皮肉つてゐる。「多能は君子の恥づるところなり。」(百二十一)「八重櫻はことやうのものなり、いとこちたくはじけたり、植ゑずともありなむ。……蔦、葛、朝顔、いすれもいと高からずさゝやかなるが、垣に繁からぬよし。」(百三十九)

「この外世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。おほかた何もめずらしくあり難きものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうのものなくてありなむ。」(百三十九)「こちたく多かるましてくちを

し。朝夕なくてはかなはざらむものこそあらめ。その外は何も持たでぞあらまほしき。」(百四十) この他第四百十三段には、人の終焉のありさまに、あやしきことなる相を語る事の愚劣を痛罵し、第五百十四段には、西園寺内大臣殿が、腰かがまり眉白き上人を「あなたふとのけしきや」と仰せられたに對し、むく犬の、あさましく老いさらばひて、毛はげたるをひかせて「このけしきたふとく見え候ふ。」と皮肉つた、建武中興の功臣、資朝卿が、東寺の門で雨やどりせられた際拂然と覺られて、ことやうに曲折ある植木趣味は畢竟不具者を受すに等しいとて植木を皆掘り棄てられたと云ふ話にさもありぬべきことなりと云つて賛成してゐる。又仁和寺の法師の馬鹿騒ぎ、(五十三)、御室のいみじき兒をさそひ出さんとした、失敗談(五十四)を述べた後、「あまりに興あらむとすることは、必ずあひなきものなり」と云つてゐる。彼にとつては、人生の中心に觸れないものは悉く價值がなかつたのである。と云つて彼を實利一遍の沒趣味漢と見るはいみじきひがごとである。すなほなるもの、自然なもの、なにとなきもの、之等は皆彼の美とする所であつた。「荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひ、しめやかにうちかほりて、忍びたるけはひいとのあはれなり。」(三十二)

又彼は一方鋭い官能の持主であつた。聰明な彼の神經は常に緊張し、磨かれてゐた。をりふしのうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。と云ふ一段(十九)は雄辯に此事を物語る。就中「汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いとゞ白うおける朝、やり水より煙のたつこそをかしけれ。」又二十一段の「人遠く水草清きところにさまよひありきたるばかり、心なぐさむことあらじ。」等は皆彼の面目を躍如たらしめる。又彼は、艶なるもの、得ならぬ匂ひ、なまめかしきもの、に對しては常に心をときめかしてゐた。(八、九、十六、二十四、四十三、四十四、百四、百五、二百三十三)等とは云へ彼は決して單なる感能的享樂主義者ではなかつた。彼は感能を通して現はるゝ精神美に對してもそれと劣らぬ鋭い感交性を持つてゐた。されば、「人は、かたちありさまの優れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。」とは云ふものの、「めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそくちをしかるべけれ。」(一)とて感能的美的究極を訴へてゐる。美の究極の相は常に魂と形と相一對したものでなければならぬ。魂なき美とは頭なき人の如きものである。その戀人ヴァンシルの藝術的失敗を目撃した下オリアンは、失望の餘り「お前は

わしの友を殺してしまつた。お前は、わしにとつては一の落異であり、天才であり、才子であり、お前は大詩人の夢想を實現化し、藝術の影に形象を與へてくれたが故に、わしはお前を愛してゐたのだ。お前から藝術を抜き去つたらお前は全くの零だ。お前は美しい假面をつけた馬の足だ。」（ドオリアン・グレイの畫像七章）と慨いてゐる。兼好は「かたち心ざまよき人も才なくなりぬれば、しなくだり、顔悪くさげなる人にもたちまじりて、かけず、けおさるゝこそ、本意なきわざなれ、」（一）と明かに精神的美の感能的美に對する優越を説いてゐる。魂の美が美全体にどんな重要な力を持つかと云ふ事は、ギリシャの彫刻とローマの彫刻とを比較すれば思半にすぎるものがあらう。そうしてこの魂の美を發揮することが吾々の任務である。「しなかたちこそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも、うつさばうつらざらむ。」（一）

兼好の、この超感能的美觀は尙多くの所に於て現れてゐる。「すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやの中ながら思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。」（百三十七）兼好の宗とする所は、單なる感官の刺激ではなくして、それに供ふ氣分、情緒の持つ、極めて微妙な複雑な美である。「望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて持ち出でたるが、いと心深く、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。」（百三十七）夜に入りての一段も亦彼の情緒主義をよく現はしてゐる。（百九十一）彼は豊かな體驗の所有者であつた。さればこそ、彼にとつては念々の利那が尊く感ぜられて仕方がなかつたのである。鋭く澄んだ彼の眼は隨所に美を見出したのである。「折にふれば何かはあはれならざらむ。」（二十一）

彼は一面尙古主義者であり、保守主義者であつた。「何事もふるき世のみぞ慕しき。今様はむげにいやしくこそなりゆくめれ。」（二十二）猶第十三段にも此思想は現れて居る。此は彼の有職古實趣味に基くのであらうけれども、一方今様は彼の美的標準から見ても、何となくあき足らなく思はれたのであらう。殊に彼の排斥した、今様は、けばくしい俗惡趣味である。

簡雅素朴に對して、も一つ彼の美を特徴づけるものは、餘裕主義とも稱す可き一種の趣味である。彼は無常を痛感し利那の尊貴を悟つたけれども、世紀末的詩人等の如く、あせらなかつた。常に一抹の餘裕を残して居た。東洋流の平靜を保持してゐた。



彼は切りつめる事が嫌であつた。キリ／＼一ぱいの生活を悪んだ。「凡て何も皆、このとゝのほりたるはあしきことなり。し残したるを、さてうちおきにたるは、おもしろく生きのぶるわざなり」(八十二)「生きのぶるわざ」とは面白い考である。

吾々に期待の感情を起こさせ、想像の作用へ餘地を與へるから面白いのである。之等はレッシングの考方(ラオコオン、第三章)等を聯想せしめる、鋭い人性の機微に觸れた見解である。

利那は尊ばねばならぬ。然し我武者らな突激には奥ゆかしさがない。「さはあれど、それもすたれたところのなきは、一生このことにて暮れにけりとつたなく見ゆ。今は忘れにけりといひてありなむ」(百六十八)隨つて彼は無用の用と云ふ事を説てゐる。「造作は用なき所を造りたる、見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよし」(五十五)此の不備なることを尊ぶ考は彼の戀愛觀に於て最もよく現はれてゐる。「よき細工は、少し鈍き刀をつかふといふ」(二百二十九)

之も彼の餘裕主義乃至は情緒尊重の現れである。さてかゝる美的理想の實現は如何にして可能なるかと云ふに「かやうのことは、たゞ朝夕の心づかひによる」(三十二)のである。まづ吾々は、人生に於て何が最も尊いかを知らねばならぬ。そしてひたぶるに精進せねばならぬ。それは朝夕の心がけである。念々の一利那に無限の價値を見出す生活である。

かう考へて來ると彼は單なる一趣味論者と云ふよりも、寧ろ偉大なる人生指導者の様に思へる。確かに彼は單なる趣味論者と見るには餘りに深い、鋭い、眞剣な思想に満ちてゐる。彼は非凡なる智的直觀主義者であり、優れたる眞の美的享受者である。彼の生活は人生の一の典型を示すものである。

彼の魂は異常に鋭く鍊れて居た。従つて彼の表白は極めて簡單ではあるがその中には、無限の内容を藏してゐる。氣韻が生動してゐる。彼の文章が其を示す事は今更云ふ迄もない。彼の筆蹟、繪畫を見ると一層この感が深くなる。彼が書畫に親味を持つてゐた事は衆知の事である。(一、二十九、八十一、百二十二、古畫備考)

彼の書體はいかにも、すなほな、簡潔なものであるが、その筆蹟には、漲る力がじつと壓へられてゐる。畫にしてもそうである。いかにも名人の工夫と云ふ事が考へさせられる。此點に於て彼は、光悅や宗達、光琳等の藝術と相似つた分子を多くもつて

ゐる。兼好が元祿の世に住んだなら、必ずや光琳の如き藝術を生んだであらう。

要するに彼の美は簡雅素朴の内に無限の内容を含んでゐることにあり、之は彼の鋭い捨離撰擇の結果であり、その捨離撰擇は彼の無常觀によつて淨化されたものである。

(丁)

(六、一一)